



親亡き後、家族なきあとの障害当事者の住まいを考えることは家族にとって深刻な問題ですが、どうしても先延ばしになるのが現状です。特に高次脳機能障害は事故や病気で起こる中途障害なので、発症直後、病院での入院、治療に始まり、多くの場合、当事者も家族も現実感のないまま自宅に退院し、そこからさらに通院による医療的リハビリを経て生活、就労支援へとつながっていきます。この長い時間、家族は発症直後から自分たちの生活を犠牲にして介護を続けます。その結果、家族と当事者の関係は「介護する人とされる人」に固定化され、当事者の自立的な住まいを考えることが先延ばしになってしまいます。

また、発達障害の場合は特別支援学校等での保護者のつながりがあり、卒業後の生活について情報も得やすいのですが、高次脳機能障害の場合には若年の発症でない限りそのような機会はありません。制度が今ほど発達しておらず、適切な支援を受けられずにきた人たちは、家族が支えるしかなかったために問題はさらに深刻です。このように長い時間を家族と暮らしてきた当事者にとって、家族と離れることを決意することも困難ですが、当事者を支えることに献身してきた家族にとっても障害のある家族と離れて暮らすことは容易ではありません。当事者、家族のどちらにも支えが必要です。また、生活と日中活動の両方を合わせた支援が必要です。

今回のフォーラムでは、奈良市の社会福祉法人「青葉仁会」(*)からもご参加いただき、高次脳機能障害の当事者と家族が安心して移行できるそれぞれの自立と住まいについて考えます。なお、青葉仁会は、高次脳機能障害者の住まいについて、十分なニーズが有り、法人での受け入れ態勢を整えば、運営を検討したいというご意向です。

* 青葉仁会は、養護学校卒業後の生徒たちの生活を案じた先生たちによって作られた支援施設で、現在では拠点となる施設9カ所と10のグループホーム、および入居施設を運営されています。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.aohani.org/>



おおさか脳損傷者サポートセンター

大阪府大阪市浪速区桜川4丁目9番27号

TEL/FAX 06-6562-0031

E-mail osaka-tbi-support@y3.dion.ne.jp